サンスクリット語文法ノート (7)

Caland 接辞

松浦　高志

1　はじめに

Willem Caland は新アヴェスタ語において，-ra- や -ma- で終わる形容詞が複合語の前分となるとき，それらが -i- に置き換えられることがある，と指摘した．このような接辞を Caland 接辞（Caland Suffix）という．あるいはこの法則のことを Caland の法則（Caland's Law）と呼ぶことがある．また後にこの現象はインド・イラン祖語時代，さらには印欧祖語の時代にまでさかのぼると考えられるようになった. またこれら以外の接辞においても同様の現象が広範囲に起こることが指摘されるようになったため，Caland 体系（Caland System）と呼ばれることもある．

2　Caland

2.1 xrvi-drav-「血まみれの木製の武器を持った」

Caland は „*Khrvidru*-“, 266–268 で，xrvi-drav-「血まみれの木製の武器を持った」は xrvi-° (< *kreu̯h₂-)「血のような，血のように赤い」（cf. Skt. krav-ís-「生肉」）と drav-「木」（cf. Skt. dā́ru-「木」）から作られる複合語であると論じた．そしてアヴェスタ語では原級が -ra- または -ma- で終わる形容詞は，比較級になったときと複合語の前分となったときに，ほかの印欧語と同様にそれらが脱落し，-i- に置き換えられることがあることを指摘し

た．そして xrvi-drav- と比較できるものとして YAv. xrū-「生肉」，xrū-ra-「血まみれの」，xrū-ma-「怖い，不気味な」，Skt. krū-rá-「血のように赤い」を挙げている．なお，Caland は挙げていないが，これらに Skt. á-kravi-hasta-「血のついた手をもたない」（ṚV V.62.6）を加えるとよいと思われる（*AiG* II-1.59 も見よ）．またほかの印欧語には，たとえば，希 kré(w)-as「肉」，羅 cru-or「血」がある[1].

Caland は，xrvi-° 以外には，たとえば YAv. tiɣ-ra-「鋭い」と Skt. tig-má-「鋭い」を挙げている．これらはそれぞれ *-ro-, *-mo- で終わり，複合語では YAv. tiži.arštay-「鋭い槍を持つ」，tiži.asūra-「鋭い牙を持つ（？）」，tiži.dąstra-「鋭い歯を持つ」となる．また Skt. śvit-rá-「白い」に対して YAv. spiti.dōiϑra-「清らかな目をもつ」がある．また Skt. sthū-rá-「厚い，大きい，重い，強い」（形容詞の原級）に対して sthaviṣṭha-「もっとも大きい（等）」（最上級）である．

2.2 -ra- で終わる形容詞が複合語の前分として用いられるとき

同様の現象がギリシア語でも起こることは Wackernagel, *Sprachkunde* で指摘された[2]。そのため，特に古い第二次文献では「Caland と Wackernagel の法則」と呼ばれることがある．Wackernagel は，ギリシア語には argi-「輝く色の，明るい色の」（cf. Skt. ṛj-i-「速い」）を前分としてもつ Bahuvrīhi 複合語が多数存在することを指摘した．たとえばホメーロスは希 argi-kéraunos「白く輝く雷をもつ」（ゼウスに係る形容辞などとして），希 argi-ódous「白い歯をもつ」，希 argí-pous「白い足をもつ」などを用いている．

---

[1] Bartholomae, *Wörterbuch*, s.vv. xrū-; xrūma-; xrūra-; xrvi-°; xrvī.drav-, xrvi-drav-; dārav-, drav-; *NIL* s.v. *kreu̯h₂-.

[2] Wackernagel, *Sprachkunde*, 8–14 („ἀργικέραυνος und Genossen“), = *Kleine Schriften*, I.769–775.

またこの希 argi- と同根の単語には希 argennós「白い色の」（アイオリス方言形），希 en-argḗs「（神々の姿形が）目に見える」があり，どちらもホメーロスが用いているが，前分の希 argi- にもっとも近い形容詞は希 argós「輝く色の，白い」であると述べ，希 argi-kéraunos「白く輝く雷をもつ」がなぜ希 *argo-kéraunos という形にならないのか，と論じている．そして前述の Caland の研究を「Caland の法則」（„Die Calandsche Regel“）と呼んで引用している[3].

なお，サンスクリット語の形容詞 r̥j-rá-「速い」はこの希 argós「輝く色の，白い」に対応し，希 *arg-ró-s (< *h₂erĝ-) の二つ目の r が一つ目の r により異化をこうむって脱落したものと考えられる．

3　その後

Caland によるインド・イラン語における研究と，Wackernagel によるギリシア語における研究より後の研究についてそれぞれ簡潔に述べる．**Wackernagel** は *AiG* II-1.59–61 でサンスクリット語における Caland の法則について述べており，先行文献を挙げながら -ant- が -i- に，-nu- が -i- に，-u- が -i- に置き換えられる例を説明している．**Kuryłowicz** は -u- で終わる形容詞の例を加えている : ur-ú-「広い，大きい，多量の，みごとな」と svād-ú-「甘い」の比較級はそれぞれ vár-īyas-, svā́d-īyas-．また Kuryłowicz は，サンスクリット語の *śuc-i- のような *-i- を用いるものがむしろ基本形で，実際に用例が確認できる śuk-ra- の方が，*śuc-i- から派生した形容詞であると考えた．すなわち，*-i- を用いる古形が複合語の前分などの形で残っている，ということである．しかしこれに対して **Watkins** は śuk-rá-, śóc-īyas-（比較級）や希 kȳd-ró-s, kȳd-i-（複合語の前分として）は歴史的な派

[3] Wackernagel, *Sprachkunde*, 9 (= *Kleine Schriften*, I.9).

生関係にあるのではなく，共時的（synchronic）な派生関係にあると述べた．現在でも一般にこの考え方が支持されている．Watkins はこの中で，羅 rub-ē-re (< *rud^h-ē-)「赤い状態である」は状態接辞 *-ē- を用いて印欧祖語の形容詞 *rud^h-ro-s「赤い」から派生しており，Caland の法則と同様に *-ro- を落としていると論じている．**Gonda** は -rá- で終わる形容詞と -as- で終わる（中性）名詞の間に明らかな関係が存在する例を挙げている．たとえば das-rá-「驚くべき行いをする」と dáṃs-as-「驚くべき行い」，また ug-rá-「力強い」と ój-as-「力強さ」である．これらはギリシア語の kȳd-os「栄光」（サンスクリット語の中性名詞をつくる語尾 -as- は，ギリシア語では -os-～-es- の交替を伴って現れる）と希 kȳd-ró-s「栄えある」と同様である．またサンスクリット語ではこれらの形容詞は比較級をつくる接辞 -(ī)-yas- と，最上級をつくる接辞 -iṣ-ṭha- と密接に結びついているとも述べている．たとえば ój-īyas-「より力強い」や，dū-rá-「遠く離れた」に対して dáv-īyas-「より遠く離れた」であり，ギリシア語の kȳd-ró-s「栄えある」と希 kȳ́d-is-to-s「もっとも栄えある」と比較できる．また -rá- で終わる形容詞に加えて -u- で終わる形容詞，たとえば gur-ú-「重い」の比較級が gár-īyas- になることと，これがギリシア語の takh-ý-s「速い」（古典ギリシア語では *-u- は y [ü] に変わっている）の最上級が希 tákh-is-to-s になることと比較できると述べている．また，この現象にはいくつかの接辞が関わっていることから「接辞群」（Suffixverband）という **Leumann** による名称を引用している[4]．

Caland 接辞に関してはじめて体系的に論じたのが **Nussbaum** である．彼は一連の接辞について次のように結論づけた．印欧祖語において，ある

---

[4] Kuryłowicz, *Inflectional*, 232; Watkins, ‘Statives’, 64–65; Gonda, *Indian*, 52–53; Leumann, „*u*- und *yu*-“.

語根は Caland 体系をもっていることも，もっていないこともある．その語根は，動詞の分野においては，状態接辞 *-ē- を用いることがある．またその語根は，名詞の分野においては，中性名詞をつくる接辞 *-es-/-os- や形容詞をつくる接辞 *-ro-, *-u-, *-i-, *-ont- を用いることがある．さらにこれらの形容詞から形容詞を派生させることもできる. サンスクリット語では，複合語の前分に付ける接辞としては *-i- を用いることが好まれる．

また **Pinault** は Caland 接辞群を，形容詞をつくる接辞 *-u-, *-i-, *-ro-, *-ent/ont- と中性名詞をつくる接辞 *-os-/-es-，状態動詞をつくる接辞 *-ē- (< *-eh$_1$-) からさらに派生させるときに用いられる接辞（e.g. -ui-, -uno-, -iro-）は基本的にそれぞれの子孫言語で別々に作り出されたものと論じた. たとえば rudh-i-rá-「赤い」（AV）は rudh-i-krā́-「ルディクラー（インドラによって負かされたアスラの名前)」（ṚV II.14.5）に見られる *(h$_1$)rud^h-i- と，希 eryth-ró-s，羅 ruber に見られるような *(h$_1$)rud^h-ró- を混用したものと述べている（*AiG* II-2.361 も見よ）. また動詞語根 *tep-「温かい」（cf. Skt. tap-）から táp-u-「焼けるように熱い」（ṚV II.4.6, IX.83.2）や táp-as-「熱」（cf.羅 tepor「温かさ」）が作られるために，これらを混用した táp-uṣ-「焼けるように熱い」（ṚV II.30.4, II.34.9, VI.52.2）が作り出されたと述べている[5].

ラテン語の -i-dus で終わる形容詞との関係もよく論じられる．これは Caland 接辞 *-i- に形容詞をつくる接辞 *-d^{h}o- をさらに付加したものである．羅 rapidus「速い」，羅 splendidus「見事な」のように -i-dus で終わる形容詞はしばしば分詞のように用いられることがあるが，これが -n- を用いる分詞と似た働きをもつことがある．さらに *nog^w-no- > Skt. nag-ná-「裸の」，*nog^w(e)-do- >羅 nū-du-s「裸の」のように *-n- を用いる分詞と *-d- を用いる形容詞との関係も考えることができる．このように Caland 体系が

[5] Pinault, « ἀγαθός », 166–167; Pinault, ‘Neglected’, 266–267.

対象とする領域は非常に広い.

Balles は，本来「……の状態である」という形容詞的な意味をもつ動詞と，その Caland 体系についていくつかの例を挙げている[6].

(1) jū- < *ĝeu̯hx-「急ぐ，急がせる」: jáv-as-「速いこと」，jav-īyas-「より速い」.

(2) svad- < *su̯eh2d-「甘い，甘くなる」: svād-ú-「甘い」.

(3) tij- < *(s)tei̯g-「鋭い，鋭くなる，鋭くする」: tij-rá-, tij-má-「鋭い」.

(4) mad-「泡立つ，喜ぶ，興奮する，酔う」，< *mad-「湿った，湿る」: mad-i-rá-「酔った，興奮した」，希 mad-a-ró-s「湿った」.

(5) pā́paje (ṚV X.105.3, intensive) < *peh2ĝ-「かたい，かたくなる」，paj-rá-「かたい」.

以上の例のうちほとんどは，ある一つの印欧語において Caland 接辞を用いてさまざまな形態を派生させている例というよりは, むしろいくつかの印欧語を比較したときに，Caland 接辞を用いたさまざまな形態がそれぞれの印欧語に残っている例であった. 比較的一つの印欧語にさまざまな形態が残っている例としてギリシア語の kŷd-os「栄光，名誉」（*-os-/-es- 語幹中性名詞）を挙げておく．希 kȳd-ró-s「栄えある」が形容詞の原級，希 kȳd-ī́ōn がその比較級，希 kŷ́d-isto-s が最上級である．また複合語としてはたとえば希 kȳd-i-áneira「男に名誉をもたらす」が，また複数の接辞を混用したものとして希 kŷ́d-i-mo-s「栄えある」がある.

印欧祖語やその子孫言語における「法則」類の概要と参照文献を簡単に調べるには Collinge, *Laws*, ‘Further’; Mayrhofer, „Ergänzendes“ を見るとよい．Caland の法則については Collinge, *Laws*, 23–27; Mayrhofer, „Ergänzendes“, 112 に書かれている．印欧祖語における Caland 接辞につい

---

[6] Balles, *Cvi-Konstruktion*, 174–175.

てはたとえば Meier-Brügger, *Linguistics*, 288–291 (W 206), Fortson, *Introduction*², 137 (§6.87) を見るとよい．また Gotō, *Morphology*, 54 と n. 148 にインド・イラン語に関する簡潔な説明がある．さらに Stüber, *s-Stämme*, 255–260 では「Caland 体系の内部で形成された語幹」が扱われており，特に性質を表す名詞・形容詞（nōmina quālitātis）が扱われている[7]．Stüber が主に論じているのは，形容詞由来抽象名詞（Adjecktiv-abstraktum）が抽象化しているのが，形容詞の限定的意味ではなく，形容詞の述語的意味である，ということと，Caland 体系に含まれる語根がさまざまな印欧語でどのように現れているか，ということであるが，サンスクリット語に関しても，特に*h_1u̯erh$_x$-「広い」という名詞・形容詞語根から，ur-ú-「広い」という形容詞が派生していること，また形容詞由来抽象名詞として vár-as-「幅，広さ」と úr-as-「胸（＜広いもの）」が派生していることについて詳しく論じている．この vár-as- と úr-as- については，これら二つがもともと同じ単語の強語幹 *h_1u̯érh$_x$-os- と弱語幹 *h_1u̯r̥h$_x$-és- に由来し，前者は性質を表す名詞・形容詞として引き続き用いられる一方で，後者は「胸」を表す名詞として使われるようになった，すなわち曲用体系分岐（paradigm split）が起こった，と論じている[8]．

凡例

°	語形の一部省略.
***A**	A は想定形.
B < C	B は C に由来.

---

[7] Caland の法則全般について，Mayrhofer, „Ergänzendes“, 112 には Mayrhofer, *Laryngale*, 84 (§20.1.295) も参照するとよいとある．

[8] 本ノートは 2017 年 11 月 13 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習(4)」（東京大学文学部）での発表資料を，最後の段落に大幅な加筆を行ったほかは，ほぼそのまま掲載したものである．

D > E　D は E に変化.
F ~ G　F と G で交替.
***ĝ**　印欧祖語の有声無気硬口蓋音.
***h_x**　印欧祖語の喉音（x = 1, 2, 3）.
***i̯**　印欧祖語の子音化した *i（サンスクリット語の y に対応）.
***k^w**　印欧祖語の無声無気両唇口蓋音.
***u̯**　印欧祖語の子音化した *u（サンスクリット語の v に対応）.
AiG　Wackernagel, *Altindische Grammatik*.
NIL　Wodtko et al. (Hgg.), *Nomina im Indogermanischen Lexikon*.
Skt.　Sanskrit（サンスクリット語）.
YAv.　Younger Avestan（新アヴェスタ語）.
希　ギリシア語.
羅　ラテン語.

ヴェーダ文献の略号

AV　Atharvaveda.　**Ṛ̊V**　Ṛ̊gveda(-Saṃhitā).

参考文献

Balles, I., *Die altindische Cvi-Konstruktion. Form, Funktion, Ursprung* (Bremen: Hempen, 2006).

Bartholomae, C., *Altiranisches Wörterbuch* (Strassburg: Trübner, 1904).

Caland, W., „Beiträge zur Kenntnis des Avesta.　19. Khrvidru-“, *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 31 (1892), 266–268.

——„Beiträge zur Kenntnis des Avesta.　26. Adjectiva auf *-ra* in der composition“, *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 32 (1893), 592.

Collinge, N. E., *The Laws of Indo-European* (Amsterdam: John Benjamins, 1985).

—— ‘Further Laws of Indo-European’, in, W. Winter (ed.), *On Languages and Language: The Presidential Addresses of the 1991 Meeting of the Societas Linguistica Europaea* (Berlin: Mouton, 1995), 27–52.

Fortson, B. W., IV, *Indo-European Language and Culture: An Introduction*[2]

(Chichester: Blackwell, 2010).

Gonda, J., *Old Indian* (Leiden: E. J. Brill, 1971).

Gotō T., *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013).

Kuryłowicz, J., *The Inflectional Categories of Indo-European* (Heidelberg: Winter, 1964).

Leumann, M., „Über *u*- und *yu*-Adjective des Altindischen“, in, *Mélanges d'indianisme à la mémoire de Louis Renou* (Paris: de Boccard, 1968), 467–478.

Mayrhofer, M., *Die Fortsetzung der indogermanischen Laryngale im Indo-Iranischen* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2005).

—— „Zu Collinges ‚Laws of Indo-European‘ Ergänzendes und Kritisches“, *Die Sprache*, 45 (2005), 110–133.

Meier-Brügger, M., *Indo-European Linguistics*, tr. C. Gertmenian (Berlin: De Gruyter, 2003).

Nussbaum, A., *Caland's 'Law' and the Caland System* (diss. Harvard University, 1976).

Pinault, G.-J., « Grec ἀγαθός », *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 38 (1979), 165–170.

—— 'A Neglected Phonetic Law: The Reduction of the Indo-European Laryngeals in Internal Syllables before Yod', in, A. Ahlqvist (ed.), *Papers from the 5th International Conference on Historical Linguistics* (Amsterdam: John Benjamins, 1982), 265–272.

Rau, J., *Indo-European Nominal Morphology: The Decads and the Caland System* (Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck Bereich Sprachwissenschaft, 2009).

Reichelt, H., *Avesta Reader: Texts, Notes, Glossary and Index* (Strassburg: Trübner, 1911).

Rix, H. (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*[2] (Wiesbaden: Reichert, 2001).

Stüber, K., *Die primären s-Stämme des Indogermanischen* (Wiesbaden: Reichert, 2002).

Wackernagel, J., *Vermischte Beiträge zur griechischen Sprachkunde* (Basel: Reinhardt, 1897), 3–62. [= *Kleine Schriften*, I (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1955), 764–823].

——*Altindische Grammatik*, II-1: *Einleitung zur Wortlehre. Nominalkomposition* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1905).

Watkins, C., 'Hittite and Indo-European Studies: The Denominative Statives in *-ē-*', *Transactions of the Philological Society*, 1971, 51–93.

Wodtko, D. S., Irslinger, B., und Schneider, C. (Hgg.), *Nomina im indogermanischen Lexikon* (Heidelberg: Winter, 2008).